

「第5回 大阪城東部地区まちづくり検討会」 議事要旨

- 日時 令和5年12月26日（火） 午前10時から11時
- 場所 大阪府庁 新別館南館8階 大研修室
- 出席者 別添「出席者一覧」のとおり

■ 議事要旨

以下資料により、各委員と意見交換を行い、2028年春の新駅開業とともに、駅前となる大阪公立大学や周辺の1.5期開発のまちびらきに向けて、次回検討会において1.5期開発の開発方針をとりまとめていくことを確認した。

(資料)

- ・配席図、委員一覧
- ・資料1「大阪城東部地区のまちづくりの方向性」の検討状況について
- ・資料2「大阪城東部地区のまちづくりの方向性（2023年度版）【たたき台】」

■ 議事内容

1. 開会

○森岡会長（大阪府副知事）

- ・大阪城東部地区については、昨年度に策定した「大阪のまちづくりグランドデザイン」の都心部エリアとして位置づけており、うめきた2期事業や新大阪駅周辺地域、夢洲地区などと並び広域的な拠点として、大阪府市、関係者の皆様と連携した取り組みを進めている。
- ・昨年度のOsaka Metroの新駅構想の公表以降、本年5月にマーケットサウンディングを実施し、本年8月にとりまとめた結果を参考に、関係者がそれぞれ検討を深めてきた。
- ・本日は関係者の検討状況を確認し、皆様からの意見をもとに今後の1.5期開発の方針を策定するための検討を進めていきたいと考えている。皆様の活発なご意見、ご提案をお願いしたい。

2. 議事

■「大阪城東部地区のまちづくりの方向性」の検討状況について（資料1）

○事務局（大阪都市計画局）

- ・昨年度の検討会以降、1.5期開発の具体化に向けて本年5月からマーケットサウンディングを実施し、その結果を8月に公表するとともに、関係者において民間提案を参考として検討を進めた。
- ・今回の検討会は、マーケットサウンディングの結果や関係者の皆様の検討状況について確認いただき、今後予定する1.5期開発の方針策定に向けた意見交換を行うことを目的としている。
- ・1.5期開発に向けたマーケットサウンディングの結果について報告する。本年5月に提案募集を行い、7月に6団体から提案を受け付けた。提案のあった主な内容については、大阪公立大学の1.5期森之宮キャンパスを設置予定のA地区では大学施設に加えて、学生寮、賃貸オフィス、貸会議室、商業施設などの提案があった。Osaka Metroの用地であるB地区は、アリーナ・ホール、ホテル、商業施設、大学施設、住宅などの提案があった。旧清掃工場跡地であるC地区は、商業施設、次世代交通等の拠点となる駅前広場などの提案があった。
- ・開発スケジュールについては、2028年春予定のまちびらきに向けた早期の事業者公募を求める声があった。今回提案を求めたエリアの外ではあるが、新駅の駅ビル屋上などを活用した空飛ぶクルマの離発着場の設置などの提案もあった。以上がマーケットサウンディングの結果である。
- ・1.5期開発に係るOsaka Metroの開発構想（案）について、Osaka Metroから主に3つの提案があり、「新駅」、「駅ビル」、「大規模集客施設」が示されている。「新駅」については、昨年の検討会以降、検討が進められている。「駅ビル」については、新設される駅の上部にビルを建設することが検討されている。また、B地区の「大規模集客施設」は、大阪公立大学との連携や、地区の集客・交流の核となり、市民の交流にも資するアリーナ・ホールなどの大規模集客施設を核とした開発の検討が進められている。

- ・1.5期開発に係る大阪公立大学の開発構想（案）について、1期キャンパスは、2022年の12月から本格的に工事が開始されており、2025年秋の開設に向けて建設工事が進められている。1.5期キャンパスについては、新駅設置や周辺開発と歩調を合わせ、民間活力の導入により整備をめざすこととなっている。開発においては、民間企業、行政機関と密接に連携することによって、都市シンクタンク機能や技術インキュベーション機能のさらなる充実を図り、大阪の都市課題の解決、産学連携、スタートアップ創出、イノベーションの誘発を図ろうとしている。
- ・1.5期開発の基盤整備の検討の方向性について、昨年の検討会において、次世代型駅前空間の検討を進めていくと報告し、その具体化に向けて検討を進めている。検討途上だが、交通の結節点として交通を処理する「交通空間機能」、交流機能、サービス機能、防災機能などで構成する「環境空間機能」の2つの機能を確保していきたい。
- ・歩行者空間等について、森之宮キャンパスから大規模集客施設、新駅・駅ビル、第二寝屋川沿いの水辺空間、大阪城公園をつなぐ歩行者空間の確保に向けた検討を進めていく。また、ABC地区内での広場空間などを配置について検討していきたい。今後、公民が連携した快適な歩行者動線等が確保できるよう検討を進める。
- ・本日説明したマーケットサウンディングの結果、および関係者の検討状況を基に、今後、地区のより一層の活性化に資する土地利用や基盤整備のあり方などの検討を進める。そのうえで、次回の検討会において、1.5期開発の開発方針（案）に関して意見交換を行う予定としている。
- ・1.5期開発とは少しエリアが離れるが、南側の多世代居住複合ゾーンの取り組み状況も併せて報告する。旧UR庁舎を活用した暫定活動拠点の取組として、リハビリテーション学研究科を中心に大阪公立大学 Well-being 共創研究センターの活動拠点を設け、地域の住民の方々とともにスマートエイジング・シティの取り組みを進めていくとされている。

■「大阪城東部地区のまちづくりの方向性（2023年度版）【たたき台】」について（資料2）

○事務局（大阪都市計画局）

- ・以上の検討内容を受けて、「大阪城東部地区のまちづくり方向性(2023年度版)【たたき台】」を作成した。
- ・次回以降の検討の進め方を含めて、次回検討会において1.5期開発の開発方針の意見交換を行っていきたくと考えている。資料2の裏面部分に1.5期開発の開発方針を記入する欄を挙げており、今回の意見を受け2023年度版として取りまとめを行っていきたく。

■意見交換

○岡井委員（立命館大学）

- ・駅前空間のイメージについては、新たに作る駅前広場なので、自動車交通広場というよりはできれば一般車を追い出して、歩行者が中心の駅前広場になると良いのではないかと。その際には、車は一般車のみを追い出すだけなので、バスやタクシー等の公共交通機関はもちろん入る。また、最近の環境という観点から、自転車やスローモビリティのようなものはいろいろところで活用が始まっているので、そのようなものを中心とした広場空間に整理することで、歩行者中心やウォークアブルなエリアが実現可能になるのではないかと。
- ・1.5期開発に係る大阪公立大学の開発構想（案）については、せっかくこの場所に新たに大学が設置されるので、大阪公立大学がグローバルな大学となるような拠点づくりを是非ここで実現していただきたい。例えば、A地区に「イノベーション」というキーワードがあるが、最近、海外からの研究者との研究交流が増えてきており、これからの時代はグローバルの中で研究をはじめ、様々なことに取り組んでいかなければならない。そのため、本地区で海外の研究者を誘致し、大阪公立大の研究者を中心とした日本の研究者と交流するような拠点になっていくと良い。関西国際空港からのアクセスも悪くない。ここで育った学生が将来、海外でグローバルに活躍するような、海外でも活躍できる人材が輩出できるシステムになれば良いのではないかと。
- ・1.5期開発に係るOsaka Metroの開発構想（案）において「アリーナ・ホール」を検討しているとのことだが、大学にとってホールはとても重要であり、形式的なことを言うと入学式・卒業式に使うということもあるが、海外からも来られるような大規模なセミナーを開催したりするときには広い

会場が必要である。隣接する地区であるため、民間の施設だがいつでも大学が使えるような形で整備をしていただくと使い勝手も良く、グローバルな大学を構成する要素としてホールは非常に有効と考える。

○嘉名委員（大阪公立大学）

- ・広域的な視点に関して、資料2で広域図が2つ提示されているが、大阪城東部のまちづくりについて、大阪城を中心としてOBP・京橋・天満橋・森之宮あたり一帯を含めた全体のなかの一つのまちづくりとして、是非大きなスケールでまちづくりを進めていただきたい。大阪市内の都心部に残された最後の一等地だと思う。ここで何を行うかがこれからの大阪の将来像を決めていくという非常に重要な局面だと思うので、城東区の活性化という視点と広域的な視点を一体的に考えていくことが重要である。
- ・「駅前空間・駅ビル」について、最先端の未来のまちづくりを可視化するような駅前空間を実現していただきたい。特に、駅ビルと駅前空間、B地区、水辺空間を含めた全体で駅前空間が仕上がってくる。そのときに重要なことは、個別に考えるというよりはどんな良い駅前空間を作るのかという全体構想が非常に重要になる。とりわけ駅ビルは、タイトな敷地に建てられることが多く、どうしても細長くそそり立ってしまうことが多い。敷地の制約上の難しさも織り込みながら、一体として計画を作ることが重要であるので、個別に検討するのではなく、駅前広場・駅ビル・B地区・C地区を一体的に検討いただく視点が必要ではないかと考えている。
- ・このことに紐づいてくる「水辺空間」と「水辺の歩行者空間」については、JR大阪環状線を挟んで西側に位置する大阪城公園とOBP等とを結ぶ非常に重要な部分である。ここへ行ってみたい、歩いてみたいと思う場所になるかどうかで、まちの第一印象は決まってくるため、水辺空間をしっかりとデザインしていくことが必要である。最近、全国的に取り組まれている「かわまちづくり」のような水辺のまちづくりを進めていくことも重要ではないかと考える。
- ・「歩行者動線の検討」については、学生がいずれ毎日歩く場所になると思うので、少し先になるかもしれないが、しっかりご検討いただきたい。併せて豊里矢田線も非常に重要なストリートになり、今後この道が京橋ともつながるといった将来性からも、この道を将来どうしていくかということも検討していただきたい。
- ・大阪公立大学森之宮キャンパスについては、1期は景観検討に取り組んできたが、1期と1.5期の一体的な景観形成をどうしていくかがこれから重要な課題になると考える。
- ・これら全体を総合して一体的な景観をどうつくっていくということが重要かと考える。今、大阪市の都市景観委員会委員長を務めているが、橋爪教授が委員長のときに大阪城を景観重要建造物に指定したということもあり、実は大阪城がよく見えるロケーションが大阪城東部であるため、A～C地区まで個別の開発が進められているということにならずに一体の景観形成ができるような検討を進めていただきたい。

○下條委員（青森大学）

- ・マーケットサウンディングについては、良い感じで進んでいる。
- ・他の先生方と同様に一体的に進めていくことをお願いしたい。
- ・「大学とともに成長するイノベーション・フィールド・シティ」として、デジタルなインフラの総合的な計画は最初から取り組むべきである。スマートモビリティにしても、例えば、特定の地点に自転車、バイクの駐車が集中するといった問題が発生した際に、人の流れをリアルタイムに計測しながら、最適な交通施設の配置ができるようなまちづくりに取り組んでいただきたい。
- ・今回想定していない「スマートエネルギー」については、様々なクリーンエネルギーを使いながら、まち全体のエネルギー消費がサステナブルにコントロールできる方法を是非考えていただきたい。そのためには、デジタルのインフラが非常に重要となる。現在、公立大学法人大阪を中心に都市OSということを考えていただいている。あるいは大阪府市ではORDENのような広域のデータ連携基盤ができつつあるので、そこに分散するデータをうまく連携させる。例えば、森之宮と別の街の駐車場や人の偏り、エネルギーの偏りをうまく最適化するようなものや、あるいはエネルギーの偏りをうまく細分化しながら、サステナブルなまちづくりをめざしていくことが挙げられる。そ

のことがまち全体のイノベーションに続いていく。また、そういう広域のデータが存在するならば、逆にそれを種にした様々な新しいビジネスが育つ可能性がある。デジタルインフラを考えながら、場合によっては人流や温度のセンサーがあるというものがまちの機能として最初からあり、新しいまちづくりができるのではないか。

- ・「エリアマネジメント」について、エネルギーにしてもエリアマネジメントは重要で、広域で考えていくためにエリア全体のマネジメントがどこかに見えていて、それが整理できていないといけない。そのような機能が是非あると良い。うめきた1期は非常にうまく成功した事例であり、梅田駅周辺はやはりエリアマネジメントが頑張っており、良いまちに変わろうとしている。このような流れをここでも作れると良いと考える。

○橋爪委員（大阪公立大学）

- ・2012年に「グランドデザイン・大阪」が制定されてから10年経過し、新たなグランドデザインがとりまとめられた段階である。長いスパンで考えると、まちづくりの枠組みを、大きく見る必要がある。現行の方向性を見ると、土地利用計画、ゾーニングが示されている。従来の計画から考え方を变えているので、ゾーニングというよりも「リゾーニング」という考え方を前に打ち出すことが必要と考える。「リゾーニング」は、たとえばニューヨークなどの都市計画で提示された方法論であり、日本では地区計画の見直しなどがこれにあたる。最近のマンハッタンのまちづくりの成功事例でも、「リゾーニング」という言葉が使われている。そこでは、交通計画の大きな変化、余った容積率を違う街区へ移転するTDR（Transferable Development Rights）などを広域で考えていくことが含まれている。大阪城東部地区の主な場所は、そもそも陸軍の演習場で、その後、砲兵工廠の下請け工場群となり、戦後になって下水処理場やゴミ焼却場、住宅団地、学校、医療施設が立地してきた。大阪市街地の少し周辺部にあつて、高度経済成長に必要な機能がここに集積したというのが経緯であり、かつてのゾーニングである。現在、我々はエリア全体の機能を入れ替えようとしているので、リゾーニングという考え方がふさわしいと思う。概念全体を上手く説明することが必要である。
- ・Osaka Metroの用地については、開発の方向性が出てよかった。従前はイノベーション・コアゾーンという概念で説明してきたが、大規模集客施設や駅周辺の商業施設等々のものを盛り込むには少し方向性が異なる部分が入ってきている。そのため、イノベーション・コアゾーンの中に新しい国際集客の拠点をつくるということ、イノベーションコアという概念に加え、1.5期開発の方針へ切り替えるなかで強く打ち込むべきであろう。従前にはそのような言葉が土地利用計画の中に記載されていない。アリーナ・ホール等がくるのであれば、それを中核として1.5期開発の方向性を変えていくということが必要である。引いて周辺も含めて見ると、近くに大阪城ホールがあり、OBPにも松下IMPホールがある。広域で見ると新しいタイプの国際集客エリアが見えてくるように感じる。是非、イノベーション・コアゾーンの中に国際集客という概念を加えていきたい。おそらくホールとかアリーナに来る観客のなかには、大学生などの若い人達が多いだろう。大学も含めて、このエリアだけで昼間人口の平均年齢は20代という、なかなか他にはないユースカルチャーに特化したエリアになりそうである。アリーナ・ホール等でのイベントのない際にも集客できるように、例えば、ナイトカルチャーというか、楽しみがあると面白い。エリア全体としては多世代でとなっているが、イノベーション・コアゾーンについては、ユースカルチャーの拠点のような方向性がいいのではないか。
- ・新駅周辺に関して、計画のなかで「駅前」という言葉を使っているが、「駅中心」に考えるという言葉に置き換えていくべきである。「駅を中心としたまちづくり」をすすめるという考えを盛り込むべきである。
- ・「スマート」という言葉が散見されるが、現在から将来を考えると、「DX」、「GX」という言葉に置き換えるべきである。1.5期開発の開発方針等と今後の計画では従来の「スマート」という言葉では不十分であると考えられる。
- ・戦前この地名は森町であった。私は大学を「知の森」であるということを申し上げてきた。当該地の他の開発にあつても、「森」を連想できる事業を展開していきたい。「森町（もりまち）」という概念を大事にし、地域をブランディングのうえ、エリア全体の構想ができたらと考えている。

- ・以前からお伝えしているが、エリアを南北に貫く市道（豊里矢田線）に都市計画道路の名前しかないため、ここの通りに愛称を作ったらどうか。陳腐に言うと「公立大学通り」「学園通り」的な名前になるだろうが、戦前は森町であったので「森町筋」みたいなものでも良いかもしれない。公募しても良いが、何か新しいエリアがここにできるのだという愛称を作ってはどうか。
- ・エリアマネジメントについて、今後考えていかなければならない。開発が段階的に進むエリアなので、将来的な地域あるいは対外的なプロモーションの拠点やそこでの活動が必要である。「多世代」というなかで、大阪公立大学の新しい施設として旧 UR 庁舎を使って Well-being 共創研究センターが想定されているが、こういう活動がエリア全体のエリアマネジメント活動のきっかけとなるような方向性になるだろうと思われる。近年、新たなまちづくり活動として、日本各地にアーバンデザインセンターができています。段階的にまちがどう変わるのかという地域の説明会や対外的なプロモーション、ワークショップなどを行う都市計画やアーバンデザインの拠点となる。この種の活動が、それが将来的なエリアマネジメント団体に移行するというのを、是非とも大阪公立大学および UR 都市機構、あるいは Osaka Metro と一緒に考えていければと思っています。

○異委員代理（UR 都市機構）

- ・橋爪委員からご意見いただき感謝している。旧 UR 庁舎を大阪公立大学に利用いただき、それと併せて市民の方やこれから来られる学生の方などこのまちを使う方に、どういうまちにしたらいいのかをみんなでいろいろな意見を出し合う場としてこの場所を使っていきたいと考えている。特にまちづくりで重要であるのは、これから使う人たちがどういうものを求めているのかということ、実装可能なものはどういうものかということを中心にみんなで考えながら検討し、エリアマネジメントにつなげていければと考えている。そのような形でまちづくりに協力して一緒に進めていけたらと考えている。

○緒方委員（JR 西日本）

- ・学識経験者の方のお話を聞いていると、本当に夢のある仕組みになるのではないかと感じる。特にこの地区は、京橋・天王寺・新大阪が近くにあるため、フルスペックで作る必要はなく、何かに特化した特色のあるエリアになったらいいなと考えている。
- ・自動車交通は、例えば時間や曜日で排除し、水辺・公園があるこの一帯で学生がたくさん利用するという中で、ウォーカブルということの一つの売り物にし、まちづくりをしていくことが必要と考える。大阪城公園駅と森ノ宮駅があるため、参画し、ご協力させていただきたい。

○辰巳砂委員（大阪公立大学）

- ・大阪公立大学を昨年4月に開学したが、開学直前に「イノベーションアカデミー構想」を公表した。産学官民共創のイノベーションエコシステムを作っていく、その本部を森之宮に持ってくることにしている。大阪公立大学としてはまさにこの取組を推進して、産学官民の共創、スタートアップの育成創出、知的財産マネジメントといった機能を強化、具体的な推進を図る予定であり、大阪府市・産業界・経済界・民間企業等との連携共創にさらに強化したいと考えている。
- ・この本部ができる前にイノベーションエコシステムの機能を担うハブとして「なかもずハブ」の建設を決定し、それに向けた準備を進めている。スマートエネルギー棟と名付けているもので、これを新しく森之宮の本部に持っていこうと考えている。
- ・大阪城東部地区の1.5期開発は、イノベーションを目指す好循環を構築するための必要不可欠なものであると考えており、大阪府市はじめ、周辺の地権者とも連携を進めて、イノベーション・フィールド・シティの実現への具体化に向けて取り組みを進める。
- ・岡井委員からご指摘があったように、ここをグローバルな場所にしていくための核としたいと考えている。そういう意味では嘉名委員よりご指摘のあった「歩行者動線」が極めて重要になってくると考えている。大阪公立大学も発展できるように、例えば、歩行者デッキ等の整備を具体的に検討していただければありがたい。

○福島委員（公立大学法人大阪）

- ・2025年の秋に森之宮キャンパスの1期がオープンする。現在、建築は3割ほど進行しており、大阪府市をはじめ関係の皆様方の多大なるご支援、ご協力の賜物であり感謝を申し上げます。
- ・マーケットサウンディングの結果等から、事業者の関心が高いことについては、私自身大変喜んでいる。
- ・大阪城東部地区は大阪で残された唯一の土地であり、今後計画通りに開発が進むと、この地区の魅力からたくさんの人が集まるのではないかと思う。まちなかにある大学というのが、学生にとっても大変魅力になる。また、大学にとって競争力向上につながる事となるため、大阪城東部のまちづくりの一翼になるメンバーとして、皆様とともに取り組んでいきたい。
- ・森之宮のテーマとして、都市シンクタンク機能と産学官連携のヘッドクォーターとして、拡張していきたいと考えている。ここでは大学はもとより行政の方、民間の方など色々な方の知恵が集まる場所にしていきたい。
- ・このような取組を行いながら、地元大阪の成長と発展に貢献する、そして大阪から世界へグローバルに発展するような大学を作っていきたいと考えているため、引き続きご支援とご協力をよろしくお願いする。

○高橋座長（大阪市副市長）

- ・大阪公立大学がめざしていく方向性についてご説明いただいたが、この開発の中で求めている機能などがあればお聞きしたい。

○福島委員（公立大学法人大阪）

- ・私の希望も含めてとなるが、本学では、面積上の制約があり、最先端のAI分野を含めた情報学研究科について、中百舌島と森之宮に分散して設置することになっている。
- ・しかし、この分野は、大阪の産業や行政にとっても非常に役に立つので、1.5期開発では、情報学研究科を森之宮に集約し、大阪の発展に貢献したいと考えている。
- ・また、都市課題の解決には、いろいろな人が集まり知を創出する必要がある、それを実現する都市シンクタンク機能を森之宮において強化したいと考えている。強化のために必要な面積をさらに確保したいと考えている。
- ・都心部にある大学は学生に人気であり、優秀な人材を集めるため、東京でも関西でも大学は都心部に回帰している。大学の他の機能についても森之宮に移転することができないか、大阪公立大学で検討しているところである。

○土肥委員（Osaka Metro）

- ・交通を軸としたまちづくり企業をめざす当社としては、大阪の大動脈である南北軸の御堂筋線、またこれと同様に大阪市域の東西軸として中央線の強化を図ることにより、大阪のさらなる発展に寄与することをめざしている。東西軸については、夢洲において2025年に大阪・関西万博が開催され、2030年IRが開業されることから、この地域を西の拠点と位置づけている。また、「森之宮」は東の拠点として位置づけており、大変重要なポジションと考えている。
- ・アリーナ・ホール等の大規模集客施設において、周辺地域だけでなく広域から広く人を集め交流を促すことにより、まちづくりコンセプトを具体化する戦略の3つ目に書かれている「多様なひと、機能、空間、主体が交流する『クロスオーバーシティ』」の実現に寄与していきたいと考えている。大阪公立大学にも是非使っていただきたいと考えている。
- ・まだ構想中であるが、新駅に駅ビルを建設することをこれから検討していきたいと考えている。新しいまちづくりの中心であるため、駅を中心としたシンボリックになるものとして、この駅ビルを考えていきたい。地域の賑わいの向上にもつながることを実現させ、関係者の方々とも協議を進めていきたい。駅ビルに関しては、Osaka Metroとしては初めての取り組みである。千載一遇の事業機会をいただいたことを前向きに捉えて検討を進めていく。
- ・景観について学識経験者から意見をいただいていたが、景観に十分配慮し、駅前広場と一体となった計画にしていきたい。また、森之宮キャンパスから、当社用地、水辺空間、大阪城公園へつなが

る歩行者動線も踏まえて、一体となった計画にしていきたいと考えている。

- ・当社の都市開発分野のみではなく、交通事業者としてC地区を中心にDXをあらかじめ施した次世代モビリティの実装をめざして、新たな交通結節拠点になるよう検討を進めてまいりたい。そのためには、大阪市所有のもと森之宮工場用地は駅を中心とした整備で重要な空間である。次世代型駅前空間の整備に積極的に関与させていただければと考えている。

○高橋座長（大阪市副市長）

- ・アリーナ・ホールについては検討中とのことだが、近隣に8,000人ほど収容する大阪城ホールが存在するため競合しないか心配している。また、大阪公立大学とのコラボレーションや、市民の方にも開かれるための施設になったら良いと考えるが、これについてはどのように考えているか。

○土肥委員（Osaka Metro）

- ・想定しているアリーナ・ホールのサイズは1万人レベルを考えている。また、大阪城ホールが存在する状況で、関係者との話を進めながら、各々の特徴をもった良い意味でのすみ分けをしたいと考えている。
- ・また、地域の皆様に活用してもらえようような内容について検討していきたい。「大学とともに成長するイノベーション・フィールド・シティ」というコンセプトの下で進めていければと考えている。

○高橋座長（大阪市副市長）

- ・もと森之宮工場用地での駅前空間の整備に積極的に関与していきたいと発言があったが、これに係る具体的な検討に向けて、大阪府市として、もし考えがあるならば伺いたい。

○事務局（大阪都市計画局）

- ・Osaka Metroから駅ビルと新駅の話の中でもと森之宮工場用地の活用について話があった。
- ・もと森之宮工場用地については新駅が設置されることを見据えて、次世代型の駅前空間の整備を位置づけている。鉄道利用者を初め、新たなモビリティとの乗り継ぎがスムーズにできるような空間整備を考えている。併せて大規模集客施設をOsaka Metro用地内に配置することや、大学生の皆様が多数通われるということから、多くの人々が快適に交流できるとともに、防災・安全面でも安心して活用できるスペースが必要になると考えている。
- ・このような観点から、公共交通事業を担うOsaka Metroと、今回の具体的な土地活用についての検討を進めていくということは非常に重要だと考えている。

○高橋座長（大阪市副市長）

- ・Osaka Metroと連携しながら、権利関係の整理や必要な調査など、具体的な検討をお願いします。

○森岡会長（大阪府副知事）

- ・大阪公立大学がここにキャンパスを作り、Osaka Metroが新駅を整備するということで、まちに動きが出て、そしてマーケットサウンディングによってアリーナなどの提案もあるということで、千載一遇のチャンスがやってきたという意味で、その重責に身が引き締まる思いである。
- ・1.5期開発についてJR西日本や先生方から発言があった歩行者動線は非常に重要になってくると考えている。特に、大きな視点で見ると大阪城公園サイドと大阪城東部をいかにつなぐかということ、この河川沿いの動線は重要になってくることから、今後検討を進めていかなければならない。
- ・1.5期と2期の動きがいかにリンクするかという観点から、旧UR庁舎を活用し、かつ大阪公立大学と連携した取組によって1.5期と2期が一体となって進み、エリアマネジメントにもつながると思う。
- ・そういう視点で、UR都市機構の今後の取組みのようなものを説明していただきたい。

○異委員代理（UR都市機構）

- ・旧UR庁舎は、このまちづくり全体のイノベーション・フィールド・シティの実現に向けて使ってい

きたいと思う。

- ・今の経済社会状況の変化は非常にスピードが速いので、これから作るものを色々と試していきながら、どうやってそれを使っていくのかを考えて、小さく実験していきながら、実装につながればと思う。
- ・大阪公立大学のリハビリテーションの関係など、市民に利用していただくなど、実験のやりかたが色々あると思う。そういうのをまちづくりに実装していくのにもうまく活用して、あるいはエリアイノベーションの議論の場にするとか、そういう形でまちづくり全体に貢献していきたいと思っており、是非一緒にやらせていただきたい。

○吉村委員（大阪市城東区長）

- ・大阪公立大学の森之宮1期キャンパスが2年後にできるというだけでも非常にワクワクするところであるし、地域の方々の期待も大きい。今回1.5期のマーケットサウンディングにより聴取し、今後開発が進んでいくということで、まさに様々な人が集まることを区役所としても地域としても、大いに期待している。
- ・一方で地域行政を預かる立場として念頭に置いておく必要があることと、2期以降引き続き、森之宮地区の開発にあたりお知恵をうかがいたいことがある。人が集まるまちづくりは非常に大事なことだと思うが、人が住む・人が暮らすまちづくりという観点も行政を預かる立場としては必要不可欠と考えている。
- ・多世代居住複合ゾーンの取組というところは区役所が意識する部分である。例えば、東部エリアというとUR森之宮団地、UR森之宮第2団地があるが、ここには今現在も多く世帯が居住している。一昔前の都市開発の結果、ドーナツ化現象が起り、人口も少ないようなところもあった。最近では都心回帰ということで、多くの人が住んでおり、夜間人口が多く、ここにつながるというのが都心部においても非常に顕著である。
- ・まちづくりを行う際には、そこに住む人々の意向が不可欠になってくると考えている。
- ・森之宮地区には森之宮小学校があるが、現在は子供の数が少なく、森之宮地区全体としても、高齢化率が非常に高い地域になっている。小学校のクラス構成は、1年生から6年生まで1学年1学級、しかも1学級1桁台という非常に少ない小学校になっており、大阪市全体としても学校再編を検討しているところである。
- ・現時点では確かにそういう再編・統廃合の対象となっているが、森之宮地区のポテンシャルは非常に高いと考えており、将来の視点で考えた場合に、本地区が今後どのように変わっていくのか非常に気になる場所である。例えば、将来的には大阪公立大学との連携とか、未来志向の新しいまちづくりをしようということなのであれば、従来にはない発想で検討していけないのではないかと考える。集客施設だけではなく居住地としてもポテンシャルが高いため、1.5期開発以降につながっていく森之宮地区の発展性というものについて、人々が住むまち、人々が生活をしやすいという視点からも議論していく必要があると考えているため、今後ともいろんなご意見をいただきたい。

3. 閉会

○高橋座長（大阪市副市長）

- ・貴重なご意見をいただき、改めてお礼を申し上げます。今年度もう一度検討会を開催し、開発方針をとりまとめしていく。
- ・本日は、大阪公立大学のグローバルな展開、新駅、駅ビル、駅前広場、水辺空間といったキーワードのご意見をいただいた。事務局においては、これら意見を参考として、開発の一体性の考え方や景観のデザインなどについて検討を深め、次回の検討会において開発方針をとりまとめられよう調整をお願いします。
- ・委員の皆様におかれましては引き続きご協力をよろしくお願いする。